

子宮腺肉腫登録実施要項 2016～

個別報告入力要領

治療患者の登録と報告は、毎年、前年1月1日から12月31日の間に治療を開始した患者につき、以下の原則に従って行う。

(1) 子宮に原発した悪性腫瘍で、組織学的に確認されたもののみを報告する。治療開始日は、子宮肉腫治療を開始した年月日とする。

(2) 診断のみ行い治療を行わなかった症例、試験開腹のみ行いそれ以後に子宮腺肉腫に対する治療をまったく行わなかった症例、診断が最終的に細胞診のみによって下された場合は報告より除外する。

(3) 初回治療として手術がなされなかった症例（放射線や化学療法など）の進行期は、MRI、CTなどの画像診断で新進行期分類を用いて推定する。

(4) Adenosarcoma with sarcomatous overgrowthは治療に抵抗することが多く、腺肉腫に含まれる。

(5) 子宮内膜間質肉腫および腺肉腫については、子宮体部腫瘍と卵巣・骨盤内子宮内膜症を伴う卵巣・骨盤内腫瘍が同時に存在する場合、それぞれ独立した腫瘍として取り扱うことに注意する。

(6) 下記の検索はT、N、M判定のための最低必要な検査法で、これが行われていない場合にはTX,NX,MXの記号で示す。FIGO進行期分類は手術進行期分類に、TNM分類は臨床的、組織学的分類にそれぞれ基づいている。

Tカテゴリ：臨床的な検索および画像診断

Nカテゴリ：臨床的な検索および画像診断

Mカテゴリ：臨床的な検索および画像診断

(7) 手術前に他の治療が行われている例では、y記号を付けて区別する。pT、pN、pM分類については、TNM分類に準じ、病理学的pTNMが用いられる。

例：ypT2bN1M0

【登録コード】

code No

1	新規報告患者（追加したい患者）
2	既報告患者の内容変更
3	既報告患者の削除

【患者No.】

自動表示（UAS20XX-から始まる番号）

【年齢】

治療開始時点での満年齢を入力する。

【手術状況】

code No

1	手術施行例
2	手術未施行例
3	術前治療施行例

(1) FIGO、UICCの進行期分類は同じにすること。

(2) 術前に放射線治療や化学療法を施行した症例は「術前治療施行例」となり、進行期分類(FIGO、TNM)は画像診断を用い、臨床進行期を推定して登録、備考1欄にypTNMとして手術所見に即してpTNM分類を入力する。

【進行期分類】

1. FIGO分類（日産婦2014、FIGO2008）

code No

10	I 期（亜分類不明）
11	I A 期
12	I B 期
13	I C 期
20	II 期（亜分類不明）
21	II A 期
22	II B 期
30	III 期（亜分類不明）
31	III A 期
32	III B 期
33	III C 期
40	IV 期（亜分類不明）
41	IV A 期
42	IV B 期

（注1）腫瘍が骨盤外の腹腔内組織に浸潤するものをⅢ期とし、単に骨盤内から腹腔内に突出しているものは除く。

（注2）多臓器の進展は組織学的検索が望ましい。

2. TNM分類（UICC第7版）

1) T分類

code No

99	TX
00	T0
10	T1
11	T1a
12	T1b
13	T1c
20	T2
21	T2a
22	T2b
30	T3
31	T3a
32	T3b
40	T4

子宮腺肉腫登録実施要項 2016～

2) N分類

code No

N0	所属リンパ節に転移を認めない
N1	所属リンパ節に転移を認める
NX	所属リンパ節に転移を判定するための最低必要な検索が行われなかった

(注1) 所属リンパ節は閉鎖リンパ節、内腸骨リンパ節、外腸骨リンパ節、総腸骨リンパ節、仙骨リンパ節、基靭帯リンパ節および大動脈周囲リンパ節（傍大動脈リンパ節）である。

(注2) リンパ節郭清の未施行例では、触診、視診、画像診断を参考にして転移の有無を判断する。

3) M分類

code No

M0	遠隔転移を認めない
M1	遠隔転移を認める
MX	遠隔転移を判定するための最低必要な検索が行われなかった

3. 組織診断

1) 組織型

code No

10	腺肉腫
90	その他
99	不明

【治療開始年月日】

癌に対する手術、化学療法、放射線療法がはじめて行われた年月日を西暦で入力する。

【治療法】

code No

10	手術
20	化学療法
30	放射線療法
40	同時化学放射線療法
50	ホルモン療法
60	分子標的療法
99	その他の治療

(1) いくつかの治療を併用した場合には、主治療を先に、その他、施行した順に入力するのを原則とする。ただし、上記7つの治療法のうち、代表的なもの6つまでを入力すること。

(2) 術前治療施行例の場合は治療を行った順に入力する。

(3) 試験開腹または癌の原発巣を除去する以外の目的の手術（尿管移植、イレウス、尿瘻形成などに対する手術）は入力しない。

(4) 開腹で生検材料のみを採取し、閉腹したものは手術としない。

(5) 手術、放射線療法の補助として、化学療法、ホルモン療法、その他の治療を行ったが、その投与量が明らかに不十分とみなされる場合は治療法として入力しない。

【備考1】

進行期分類の選択の項目にて「術前治療施行例」を選択した場合にはypTNMとして手術時所見に即してpTNM分類を入力する。

【備考2】

不完全治療、特筆すべきと考えられる事項を入力する。

3年および5年予後報告入力要領

【治療後の健否】

code No

10	生存（非担癌）
11	生存（担癌）
21	子宮腺肉腫による死亡
22	他の癌による死亡
23	子宮腺肉腫と直接関係のない死亡
29	死因不明
99	生死不明

(1) 治療後満3年、満5年について生存か否かを入力する。

(2) 癌による死亡で「子宮腺肉腫による死亡」か「他の癌による死亡」か不明のときは「子宮腺肉腫による死亡」とする。

(3) 死因がはっきりしないが腺肉腫による死亡が十分疑われる症例は「子宮腺肉腫による死亡」とする（「死因不明」としない）。

【最終生存確認年月日】

code No

1	（西暦年月日入力）
2	不明

(1) 最終生存確認年月日を西暦で入力する。

(2) 生死不明の患者はその生存を確認した最終年月日を入力する（退院後行方不明の場合は退院日となる）。

(3) 死亡した患者は死亡年月日を入力する。その年月日が不明の場合は「不明」を選択する。

子宮腺肉腫登録実施要項 2016～

進行期分類

1. FIGO進行期分類（日産婦2014、FIGO2008）

I 期	腫瘍が子宮に限局するもの
I A期	子宮体部内膜、頸部内膜に限局するもの（筋層浸潤なし）
I B期	筋層浸潤が1/2以内のもの
I C期	筋層浸潤が1/2をこえるもの
II 期	腫瘍が骨盤腔に及ぶもの
II A期	付属器浸潤のあるもの
II B期	その他の骨盤内組織へ浸潤するもの
III 期	腫瘍が骨盤外に進展するもの
III A期	1部位のもの
III B期	2部位以上のもの
III C期	骨盤リンパ節ならびに/あるいは傍大動脈リンパ節転移のあるもの
IV 期	
IV A期	膀胱粘膜ならびに/あるいは直腸粘膜に浸潤のあるもの
IV B期	遠隔転移のあるもの

2. TNM分類（UICC第7版）

1) T—原発腫瘍

TX	原発腫瘍の評価が不可能
T0	原発腫瘍を認めない
T1	腫瘍が子宮に限局するもの
T1a	子宮体部内膜、頸部内膜に限局するもの（筋層浸潤なし）
T1b	筋層浸潤が1/2以内の腫瘍
T1c	筋層浸潤が1/2をこえる腫瘍
T2	子宮腫瘍が骨盤腔に及ぶもの
T2a	付属器に關与する腫瘍
T2b	他の骨盤組織に關与する腫瘍
T3	腫瘍が骨盤外に進展するもの
T3a	1部位のもの
T3b	2部位以上のもの
T4	膀胱粘膜ならびに/または直腸粘膜に浸潤のあるもの

2) N—所属リンパ節

NX	所属リンパ節転移の評価が不可能
N0	所属リンパ節転移なし
N1	所属リンパ節転移あり

（注1）所属リンパ節は閉鎖リンパ節、内腸骨リンパ節、外腸骨リンパ節、総腸骨リンパ節、仙骨リンパ節、基靭帯リンパ節および大動脈周囲リンパ節（傍大動脈リンパ節）である。

（注2）リンパ節郭清の未施行例では、触診、視診、画像診断を参考にして転移の有無を判断する。

3) M—遠隔転移

MX	遠隔転移の評価が不可能
M0	遠隔転移なし
M1	遠隔転移あり

< FIGO分類とTNM分類の対比表 >

	N0	N1
T1	I	III C
T1a	I A	III C
T1b	I B	III C
T1c	I C	III C
T2	II	III C
T2a	II A	III C
T2b	II B	III C
T3	III	III C
T3a	III A	III C
T3b	III B	III C
T4	IV A	IV A
M1	IV B	IV B